

# 新入試制度

— いまわかっていることから考える その2 —

近畿大学 教授 教職教育部長 戸井田 克己

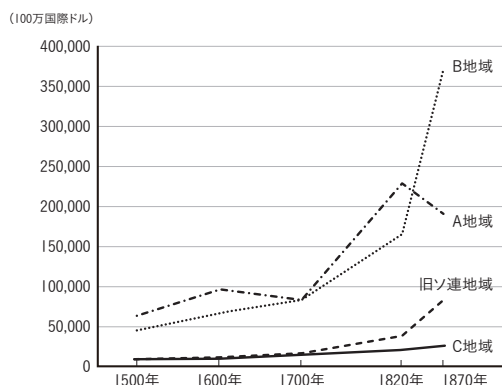
今年（2017年）7月、文部科学省（以下、文科省）は「大学入学共通テスト（仮称）」実施方針（案）をウェブサイト上で公表した〔以下、この新入試を「共通テスト」という。なお、前稿（2017年度1学期号）「新入試制度—いまわかっていることから考える—」では「新テスト」と仮称した〕。

この実施方針（案）によれば、共通テストは、「大学入学希望者を対象に、高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握する」ことを目的としている。このため、「各教科・科目の特質に応じ、知識・技能を十分有しているかの評価も行いつつ、思考力・判断力・表現力を中心に評価を行うものとする」（傍点は筆者）とされる。導入は平成32（2020）年度からで、33（2021）年度の入学者選抜から実施される。2018年度に高校に入学する生徒からおもに対象となる。

本稿では、前稿で紙幅の都合から取り上げられなかった、文科省による世界史の試作問題の後半部分を紹介す

## 資料1 共通テストにおける世界史の問題イメージ（Ⅱ）（文部科学省）

次の図は、『経済統計で見る世界経済2000年史』（アンガス・マディソン著）に掲載されている数値をグラフ化したものである。日本・中国・西欧・旧ソヴィエト連邦（旧ソ連）にあたる各地域の経済規模（GDP）の長期的な傾向を把握するために、16世紀までさかのぼって推計している。グラフと注を読んだうえで、Ⅰ、Ⅱの問いに答えよ。



注1 「西欧」、「旧ソ連」というまどめ方は、マディソンの著書によっている。  
注2 GDP数値は、主として一人あたり産出額に人口規模を掛け合わせて算出した概算値を用いている。また、国際ドルとは、異なる通貨単位を計量するために使われる単位である。

Ⅱ グラフ中の「旧ソ連地域」を示す折れ線に関する次の会話文を読んで、下の問いに答えよ。

- (教員) 旧ソ連地域のGDPは18世紀には上昇傾向を示していますね。この理由は何だと思いますか。皆さんで仮説を立てて話し合ってみましょう。
- (生徒1) 18世紀に中央アジアや極東でロシア帝国がどんどん勢力を拡大していたことと、関係あるのでしょうか。
- (生徒2) いや、ロシア帝国も工業化が進んだのではないかな。北方戦争に勝ったことは、軍事力が向上したことの一つの証しとも言えますよね。
- (生徒3) 18世紀にイギリス以外の国で工業化が進んだというのはおかしいと思います。
- (生徒4) 私は、穀倉地帯をもつウクライナやポーランドなどを占領したことが影響していると思います。当時のロシアは農産物輸出で富を築いたのではないのでしょうか。

問3 生徒1が自分の仮説の根拠として挙げえないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① キャプタ条約
- ② ネルチンスク条約
- ③ ラクスマンの日本派遣
- ④ ベーリング海峡発見

問4 生徒2が自分の仮説を統計データを用いて裏付けようとした場合、明らかに役に立たないと思われるものはどれか。次の①～⑤のうちからすべて選べ。

- ① 18世紀ロシアの品目別輸出入額の変動
- ② 18世紀ロシアの産業別人口の変動
- ③ 18世紀ロシアの地域別農奴数の変動
- ④ 18世紀ロシアの年次別戦死者数の変動
- ⑤ 18世紀ロシアの職業別納税者と納税額の変動

正答 問3 ②  
問4 ③, ④

※Ⅰの問いと正答は前稿に掲載。

るとともに、前稿に引き続いて、その要素を取り入れた地理の問題例を試作する。

資料1 は、各地域の経済成長に関する初見のグラフを提示したうえで、「グラフの示す特徴について仮説を立てて話し合う」という設定で作題されている。

これは、正答となる歴史用語をストレートに問うのではなく、仮説の立論に役立つ事象やデータと、役に立たない事象やデータとを峻別できる力を総合的な見地から試そうとしている。加えて、日本語読解力も要求される設

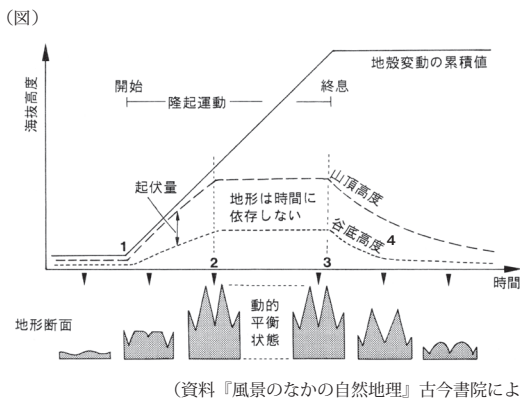
問となっており、上掲の「知識・技能」の存在を前提としつつ、「思考力・判断力・表現力」を評価しようという意図を具現化させた問題といえよう。

また、設問の形式も、仮説そのものは問いの中で提示し、「その根拠として挙げえないもの」を答えさせたり、データの裏付けに「役に立たないと思われるもの」を正答を1つと限らずに求めたりするなど、知識の丸覚えをできる限り排除しようとする意図がうかがえる。この種の問題は、地理においては従来も大学入試センター試験を中心にしばしば出題されてきたが、設問にストーリー性をもたせることにより、それがよりいっそう徹底された形になっている。

以上の世界史の問題イメージ(Ⅱ)をヒントに、地理の問題例を試作してみた(資料2)。

**資料2** 共通テストにおける地理の問題例(戸井田作成)

次の図の読み取りと、その理由や解釈に関する下の会話を読んで、あとの問いに答えよ。



(教員) 図は山地の成長と衰退のプロセスを概念的に表したものです。どのようなことが読み取れますか。2人の中で話し合い、その理由や解釈を仮説として出してみましょう。

(生徒1) はい。1から2の間では、①隆起のスピードを侵食のスピードが上まわっているため、山はまだあまり高さをもたないと思います。

(生徒2) 次の2から3の間では、隆起の運動量が最大となるので、②山は急速に高くなっていくんですね。

(生徒1) 反対に、3から4の間では、③侵食のスピードが最大となるので、山は急速に低くなっていくのではないのでしょうか。

(生徒2) それぞれの段階のうちで、山間部にV字谷などの侵食地形が最もよく発達するのは、④2と3の間でしょうか。

(生徒1) それぞれの段階のうちで、山麓部や河口部に扇状地や三角州などの堆積地形が最もよく発達するのも、⑤2と3の間ですね。

問1 会話文中の下線部①～⑤のうち、図の読み取りやその解釈として妥当性のあるものをすべて選べ。

問2 日本には扇状地や三角州などの小規模な堆積平野がよく発達した国だが、その背景としてあまり関係がないと考えられる事はどれか。次の①～⑤のうちからすべて選べ。

- ① 崖くずれが多く、土砂災害が起きやすいこと
- ② 河川の流域面積が小さく、蛇行区間が多いこと
- ③ 降雪量が多く、積雪期間が長いこと
- ④ 梅雨前線が到来し、台風もよく上陸すること
- ⑤ 変動帯に位置し、新期造山帯に属すること

正答 問1 ④、⑤  
問2 ②、③

この問題では山地の成長を概念的に表した初見の図を用いて設問している。図からは、山地の成長・衰退が隆起速度と侵食速度の相対関係によって決まること、隆起量が大きいほど侵食量も大きくなり、両者間に動的な平衡状態が訪れると地形は変化しなくなる(隆起の運動量が最大であるのは2と3の間。このとき、動的平衡状態が訪れるためには侵食の運動量も最大となる必要があり、両者はちょうどつり合った状態になる)、隆起運動が終息すると山地は侵食される一方になり、やがて準平原化していくことなどを読み取ることができる。またこれらのことを通じて、V字谷や、その侵食した岩くずが堆積してつくられる扇状地や三角州などの地形は、山地が動的平衡状態にある期間に最も発達するであろうこと、降水量が多い地域ほど侵食が進むので、これらの地形が発達しやすいことなどが類推的に理解されよう(堆積平野が発達するためには堆積物の量が多いことが必要。それには侵食・運搬物の量が多いこと、すなわち、問2では主として①④⑤の条件が必要となる)。

以上のような思考力・判断力・表現力をもたらす力として、前稿でも述べたように

- a. 地理資料をよみとき、地理に関する重要な情報を取り出す力
- b. 資料(主題図・数値資料・模式図・景観写真など)と地理的事象とのかかわりを推論する力
- c. 地理的な諸事象の相関関係や因果関係を多面的・多角的・総合的に分析、考察する力
- d. 日本を含む世界の地理的事象や、多様な世界の地域性を複合的・関連的に理解する力
- e. 資料などの根拠にもとづいて、論理的に表現する力

などが挙げられる。

今後はa～eのような学力が、より深く、広く身につくような学習指導のあり方が求められよう。